

島木健作『獄』における〈転向〉

——「癪」・「盲目」を中心に——

内 倉 尚 嗣

島木健作の第一創作集『獄』（ナウカ社、昭9・10）は、獄中の思想犯とその獄中生活に材をとった作品五篇で編まれている。『獄』は同系列の〈監獄もの〉といわれているものなかでも特異な作品とされる。中村光夫は「この獄中生活を扱った諸篇は、たんに氏の作品の系列のなかで優れてゐるだけでなく、その題材の異常性と与へる感銘の強さで、我国の近代小説のなかで、ユニツクな地位を占めるもの⁽¹⁾」と位置づけている。また、大久保典夫はこの時期の多くの転向文学のなかにあつて、『獄』は「日本的転向の特質を形象化したほとんどの唯一のもの⁽²⁾」と高く評価している。当時の転向問題を内包する〈監獄もの〉は、プロレタリア文学の題材のうえで決してめずらしいものではなかったが、そのなかでも『獄』が特異な作品集とされるのはどのような点に認めることができるのだろうか。それはかならずしも題材の特異性ばかりによるものではないだろう。本稿では『獄』所収のなかの「癪」（『文学評論』昭9・4）と「盲目」（『中央公論』臨時増刊号、昭9・7）の二作品に焦点をあて、その特異性を看取しつつ『獄』における〈転向〉の意味を探ってみたいと思う。

一 成立史的前景

『獄』に収められた「癩」、「苦悶」（『中央公論』昭9・10）、「転落」（雑誌未発表）、「盲目」、「医者」（『文学評論』昭9・11）の五篇（以上収録順）は、作品集の総題が示す通り監獄が主な舞台であり、その背景には島木自身の獄中体験が反映されていることは言うまでもない。島木は「文学的自叙伝」（『新潮』昭12・8）のなかで、「検挙された私は打ちのめされることと起き上がることを何度か繰り返したのちに、過去の自分の道に誤謬があつたことを認め、再び政治運動に携わる意志はないと転向の言葉を法廷に述べて既決の獄に下つた」と回想している。昭和四年のことである。その転向表明にも拘わらず有罪の判決を下されて満四年間の獄中生活を強いられた島木は、昭和七年に出所し、二年後の昭和九年には「可能な程度で農民のための仕事に身を近づけようと準備をする迄になつてゐたが、そのとたんに」「病気で倒れ」、その仕事を敢え無く断念する。「すると急に長い長い間忘れていた文学的な表現で何か書いて見たいといふ欲求が抑へがたい強さで湧いて来」、処女作となる「癩」を執筆するのである。「癩」で文学的出発を果たした島木は初めから転向作家として文壇に迎えられることになつた。

島木の獄中転向に重症の肺患という肉体的条件が大きく関与している^③ことは、病氣と監獄との不可分な関係を闡明した「監獄その他」（『文学評論』昭9・8）、「病氣、其の他」（『文芸通信』昭10・2）、「病囚の処遇」（『日本評論』昭11・4）などのエッセイによつて窺い知ることができる。「監獄その他」によると、島木は自分の小説が「告白的、ざんげ的、主張的等々の色合ひ」を帯びようともあくまで実体験に基づいた「監獄」の世界を書こうとしたというのである。それは「病氣と監獄と——ごたぶんにもれず、この二つを除いては、十年間の私の生活といふものは考へられない」という意識からであつた。島木の意識のなかでは「病氣と監獄と」は不可分に結び付いている。

監獄でもやはり生き死にの苦しみをしたことは私の作品のどこどこに出るとほりである。私がそれまでからだを持ちこたへて来たのは精神力の賜ものだった。精神力などといへば唯物論を卑俗にしか考へ得ない人々は笑ふのだが、さういふ人を私は哀れと思ふのほかない。しかし病氣をも克服しうるその精神力といふものは、自分を没入しうる何らかの仕事があつてはじめて出てくるので、その仕事を一切取上げられた監獄であつたから、私は弱つたのである。〔病氣、其の他〕

自己を保つための「精神力」を萎えさせるものは直接的な権力の抑圧だけではない。島木は「監獄」を『珍奇』なる「監獄その他」ものという。その「珍奇」さは、不可視で秘匿的な「監獄」のシステムにある。島木はことさら、当時の隔離病舎内の劣悪な待遇を問題にする。「病囚の処遇」では、一度病舎での生活を経験したものが、その次には容易に病舎にいきながらず、むしろひたかくしに病や苦痛をかくしている理由が、毎日変わらぬ粗末な食物と書物の不足にあることを明かし、それが官権の差別意識からきていることを指摘している。そしてこの差別意識の最も象徴的なあらわれが「隔離病舎」の在り方自体にあるといっている。これらのエッセイは刑務所の改善や行刑制度に対する不満をストレートに訴えたもので、かならずしも政治的な立場や転向小説家としての立場で書かれたものではないが、こういった「監獄」に対する視線は『獄』にも導入されているのである。

「癩」の舞台である「隔離病舎」は「社会から隔離され忘れられてゐる牢獄のなかにあつて、更に隔離され全く忘れ去られてゐる世界」である。そこでは「何よりも先ず何か特別な眼をもつて見られ、特別な取扱ひを受けてゐるといふ感じが、新しくこゝへ連れ込まれた囚人の、彼等特有の鋭くなつてゐる感覚にびんとこたへるのである」。

さげすまれ、そのさげすみが極端になつては言葉に出して言ふでもなく、何を言つてもソツポを向き、時々ふふんと鼻でわらひ、病人の眼の前で雑役夫と看病夫とが顔を見合して思はせぶりにくすりと笑つて見せたりする、それはいい加減に彼等の尖つた神経をいらさらさせるしくさであつた。だが、憎まれ、さげすまれる、といふ事は考へやうによつてはまだ我慢の出来

ることである。憎まれるといふ場合は勿論、さげすまれるといふ場合でも、まだ彼は相手にとつてはその心を牽くに足りる一つの存在であるのだから。次第にその存在が人々にとつて興味がなくなり、路傍の石のやうに忘れられ、相手にもされなくなるといふことは、生きてゐる人間にとつては我慢のできないことであつた。

〔癡〕3

「隔離病舎」における病囚が直面するのは以上のような孤絶感である。病囚が抱える「発狂の恐怖」や「自殺の誘惑」は「隔離され全く忘れ去られてゐる世界」の雰囲気を作り出す。そこでは社会的付随物が剝ぎ取られ、人間の動物的な苦悩の面だけが拡大される。病囚は隔絶された状況に投げ込まれることによつて社会的人間から生物的人間に転化するのである。ただし、『獄』の作品のねらいはそういった「監獄」の不可視的な悪弊を前景化させることだけにあるのではない。いうまでもなくその先には転向問題があり、また転向問題にからまる人間関係がある。中野重治が指摘したように『獄』の「特質の一つは、暴力と偽善の留置所よりも遙かに高い組織である刑務所にこういう人間関係（それまでの『留置所小説』では見過ごされてきた「社会関係の総和」としての「人間」関係——注）を見出した⁽⁴⁾点にあるのである。転向作家として出発した島木が、その文学的テーマとして据えた転向問題の追求は、病気の痛苦を加速させる「監獄」のシステムなかで、いかにして非転向を貫くことができるか、またそこにいかなる人間関係が絡んでくるのかということを解明するための試みであつたといえるのである。

二 『獄』の方法

島木自身、「私は最初から所謂転向作家の一人として出発した」（『生活の探求』について）『新日本文学全集・第十九卷・島木健作集』改造社、昭16・5）といっているが、『獄』を同時期のいわゆる転向文学の枠に含め込むこと

はできない。もちろん同時期の転向小説も、「権力によって強制されたためにおこる思想の変化^⑤」という転向の定義そのままに形象化されたものばかりではない。むしろ「転向文学」という枠組みを持ちながら、獄中での転向の経緯には一切触れていないという逆説的な意味をもつものの方が多かったことも事実である^⑥。しかし、『獄』は転向者の転向過程の心理だけに主眼がおかれているわけではない。『獄』においては、非転向者の内面に、あるいは転向へ傾斜しつつも非転向者への接近を試みようとするものの内面に視線が注がれている。たとえば「癩」の太田は非転向者岡田を賛美し、「盲目」の古賀は自己内部にゆらぎを持ちながらも最後には非転向を表明する。「癩」、「盲目」は平野謙の言葉を借りるならば「非転向礼讃の小説^⑦」と言うべきものである。『獄』以後の「一つの転機」（『改造』昭10・10）や「第一義の道」（『中央公論』昭11・2）が「転向者の再転向」というテーマを扱っていることと併せて考えると、『獄』はその後のコースを明確に示している作品集ということができようであろう。

島木の『再建』（中央公論社、昭12・6）までの作品が、転向問題を主題にしたものと、運動批判、組織批判に主眼をおいたものという二つの系列に大別できることはこれまで指摘されてきた^⑧。大まかな概括をするならば、前者は『獄』所収の五篇に代表されるものであり、転向するに至った作者が自己の体験に基づき転向問題を追求したものである。対し後者は「二過程」（『中央公論』昭9・7）や「一風景」（『行動』昭10・7）などのその後の短篇であり、そこには転向後の作家コースを選定するべき運動批判、組織批判の視点が導入されている。この前者から後者への移行は必然的であり、逆の言い方をすれば、転向問題の整理なくしては容易に党組織へ視線を向けることはできなかったといえるのである。

島木は、「いはゆる客観小説を書きたいとおも」いながら「しかしそれは今自分を押へつけてある息苦しきから脱れ出たのびのびとした気持ちになつてからでなくては書けない」といい、「当分は自分から離れることができず、従つてその書くものはあるひは告白的、ざんげ的、主張的等々の色合ひをむしろ露骨なほどにあらはす」だろうこと

を「仕方のないこと」だという（監獄その他）。島木にとって、党組織に対し客観的な視線を投げかけるという作業は、「今自分を押へつけてゐる息苦しさ」が解消されぬ限り取り組むことはできない問題であつた。「息苦しさ」とは転向問題をめぐるそれである。「獄」が転向問題の追求という自己目的な意図で書かれ、個々の作品が自己救済を目的にしていることは以上からも窺ひ知ることが出来る。ただし、「獄」は過去の転向体験を綴つた私小説ではない。「獄」は作者の転向体験を背後に持ちながらも、転向問題が多角的に追求されている。

私は自分のことだけを言はしてもらふ。はじめ私は「監獄」を書いてみたいとおもつた。監獄一般ではなくて、獄中に於ける政治犯人のいろいろな型を、縦から横から、前から後ろから、上から下から、巨細に観察し、余すところなく描いて見たいとおもつたのである。私の頭はその欲望のために熱し、しばらくは他のことを考へる余裕も持たぬほどであつた。

（「監獄その他」）

引用は「獄」の動機として受け取れる箇所である。島木は「自分から離れることができ」ないといひながらも、一方で「獄中に於ける政治犯人のいろいろな型」を描いて見たいといふ。そして「縦から横から、前から後から、上から下から、巨細に観察し、余すところなく」描くのさうである。以上のことから察しても、「獄」が弱さに屈した過去の自己を私小説的に復元したものではないといふことがわかるであらう。おそらく島木は「複雑怪奇な内心の劇が私小説の形式で追究しえないことを知悉していた^④」と思われるのである。

多くの転向小説がその方法を私小説的手法によつてゐるのに対し、「獄」には客観的普遍的に転向を描き出さうという意図が窺われる。大久保典夫は島木の獨創性を「自己の転向体験をそのまま描出することを考えずに、客観化・普遍化した点」に認め、島木を「転向という内心の劇を、正確に認識しえた数すくない文学者の一人」としてゐる^⑤。島木の「自己の転向体験」の「客観化・普遍化」の方法は、「転向者の非転向願望をヴァイタルに想像・復元

・指定すること」を目的とした「非私小説的方法」である⁴⁰。その方法に特徴的なのは、人物設定の仕方と人物に対する視線の在り方である。「癩」では癩患の非転向者を転向へ傾斜しつつある人物の視点を通して描き、「盲目」では、盲目の非転向者の内面に直接的に照明が当てられ、彼が非転向を自分のものにするまでの内面の振幅が描かれる。それらで追求されていることは、過去の自己を客観的に捉え直そうという意識から生まれた、自己の有り得べき(筈であった)姿であるといえる。

「癩」、「盲目」における、非転向を志向する自己と転向へ傾斜していく自己との関係は、「あるべき自己」と「かくある自己」との関係であり、そういった意味では、この二作品は「自己」内部の「ゆらぎ」を現象化させていく、昭和十年前後の「小説の小説⁴¹」のアナロジーとして捉えることも可能であろう。ただし、「癩」、「盲目」を背後で支えるものは、近代的小説形態への反省意識ではなく、過去における「自己」の可能性追求という目的意識である。

二二 「癩」における問題点

「獄中に於ける政治犯人のいろいろな型」は、『獄』五篇における人物のタイプの違いによって示されている。またそれらに対する「巨細な観察」の仕方は「癩」と「盲目」とを対比的に見みることで明らかになる。

「癩」は、主人公の思想犯太田二郎が肺患のため癩患者を収容する隔離病舎の独房に移され、そこで癩を病みながらなお革命の理想を持ち続けているかつての同志岡田良造に会い、岡田から深い感銘を受けるといのが大まかな筋である。島木はこの「癩」発表により、新人作家島木健作の名を世に流通させることになった。掲載雑誌の「編集後記」では編集人渡辺順三が「無名の新人島木健作氏の百枚の創作『癩』を発表し得たことを、編輯ではひそかに鼻を高くしてゐる。この一作こそ新人島木氏の価値を世に問ふものであり、四月創作界に驚異的な問題を提供するもので

あろう」と記し、「癩」は渡辺の予見通りすぐさま文壇の話題に上った。勝本清一郎は新聞の「文芸時評」欄で「真に驚異的な作品」、「プロレタリア文学の領域内に従来なかつた特異心理主義の道を拓いたもの」としていち早くとりあげ^四、また武田麟太郎は「不気味な不愉快極まる作品の底にあつて」、「通読するだけの元気を呼び起す力」があるとして高く評価した^四。「癩」は一般的好評をもつて迎えられたといつていいが、勝本は同文中で「一個の作品としてはもつとレブラの闘士の心境に迫り寄つて、それを外部からでなく、内部からみづから掘り開かせて読者をうなづかせるだけの方法が講じられるべきであつた」と批判し、また徳永直は「癩患者の岡田なる者が、天刑病であつても思想を変へないし、むしろそうであるが故に変へられぬ——といふ肝じんの気持のところが、作者の主観性のために妨げられて、読者には充分ハツキリとつたへられない憾みがある^四」と批判した。このように「癩」に対する否定的見解は、非転向者岡田の心理の不鮮明さに向けられたものである。

問題は岡田の心理説明の欠如である。太田は「理論の理論としての正しさは従来どほりの確信をもちながらも、しかもその理論どほりには動いて行けない自分、鋭くさういふ自分自身を自覚しながらもしかかも結局どうにもならない自分」をどうすることもできず、今は「闘ひの意志」も薄れ、「現実の重圧」に押し潰されそうである。一方岡田は太田に対して極めて冷静に「僕は身体が半分腐つて来た今でも決して昔の考へをすててはゐないよ」と語るのである。

ただ、岡田の今示してゐる落着きは決して喪心した人間の態度などではない事は明らかであり、むしろ底知れぬ人間の運命を見抜いてゐるかのやうな、不思議な落着きをさへ示してゐるのだが、——しかし、彼のかうした落着きの原因をなしてゐるところのものは、一体なんであらうか？ という点になると彼に逢つて話した後にも、太田には全然わからないのであつた。

〔癩〕7

岡田の「不思議な落着き」を支えているものは一体何なのか。結局それは岡田の口から語られることなく、太田にとって岡田の世界は「願望の世界たるに止まり」、太田は「寂しい諦め」を感じる。太田の病状は次第に悪化し、作品は不消化の感を残しつつ薄れゆく太田の意識とともに閉じられる。作品の流れにおいて見ると、太田の転向への傾斜は必然的であったといえるだろう。それは獄中における病気が「不可抗的な自然力」と化す様子や、それに加え「盤石のやうな重さをもつてのしかかつてゐる国家権力」の圧倒的な力が示されることで納得される。一方、岡田の非転向の固持にはなんら必然性がないように思われる。そういった印象を与えるのは、岡田の内面が明確に示されないことにもよるが、逆にそのことによって岡田を支える思想は無条件に「より高次の異質な信仰に変貌し^四」ているといえる。太田と岡田は、「監獄」という、転向へと導く不可思議な空間を互いに共有している。また、「病気」という肉体的桎梏も共に有している。しかし、太田の岡田を理解したいという願いにも拘らず、太田と岡田との距離は最後まで縮まることはなかった。この太田と岡田との径庭が、そのまま非転向心理を支える「思想」の非論理的な様態を示しているといえるだろう。

「癩」において、作者の、「障害を押し切つて、尚彼がその立場を貫きうるとするならば、そのよりどころはどこにあるのであらう」（批評についての感想／（一）唯心的な傾向『東京朝日新聞』昭10・1・25）という疑問は解消されずに終わっている。その問題はおのずと次作の「盲目」に持ち越されることになった。「前作『癩』の統篇のつもりで書いた」（「回顧」『帝国大学新聞』昭9・7・9）という「盲目」は、「前作が生活録的色彩が濃く、そのために掘り下げることの足りなかつた点」を追求課題とし、「暗きに徹してそこから起ち上つてくる姿を書こうとした」ものである。前作「癩」において「掘り下げることの足りなかつた点」とは、肉体的桎梏と乖離した（ように見える）非転向者の心理、また彼を支えている「思想」であらう。「盲目」の場合、その追求は非転向者の内面に密着したかたちでなされることになる。

四 「盲目」への展開

獄における衛生状態の悪さから失明した「盲目」の古賀良吉は、「発狂の恐怖」や「自殺の誘惑」と闘いながら、公判では裁判長の、「行動の出来ない身で依然その思想を固持するとは被告の理論体系からすれば矛盾ではないか」という質問にも「マルクス主義にはゆる理論と実践との統一といふのはさういふ卑俗な意味でいふのではない」と反駁し、非転向の意志を固持する。作者自身、「癩」の続篇であるという「盲目」は、一見「癩」の岡田の、ついに太田には把持しえなかつた内面のありように焦点をあて、内側から形象化したものと考えられる。しかし、常に「不思議な落着き」を湛えている岡田と、「明暗のくりかへし」に耐えながらなんとか非転向を貫き通した古賀との差異は認められるべきだろう。小笠原克は『「盲目」の古賀は「癩」の岡田と太田との絶望的な距離を設定した作者が、逆に能うかぎり太田に岡田を希求させたところに誕生した観念的人物^四』だと指摘する。小笠原の指摘に倣つていえば、古賀は岡田の「拡大された内面像」ではなく、むしろ、「もしも太田が諦めずに（畏敬羨望にとどまらず）それを希求したとすればどうなるか」という意識のもとに形象化された人物であるということが出来る。つまり、古賀はついに「寂しい諦め」を感じるに至つた太田の、在る得べき（善であつた）姿ということになる。それでは古賀の非転向を支える「思想」とはどのようなものであつたのか。古賀の非転向の真因は作品末尾で次のように説明される。

何もの、前にもたじろがぬさうした心をしかしどこに求めよう、それは結局はやはり、自分たちの今までの踏んで来た道の正しさを信じ、自分たちの終局の勝利を信ずることのなかにある。その確信だけが自分の運命の暗さにも笑へる余裕をあたへて

くれる。真暗な独房のなかに骨の髄までむしばむニヒルをかんじながら、しかもなほそこから立ち直つて来た古賀の力もそのなかにあつた。その確信がもつと身について来た時にはじめて今よりももつとたくましい意欲に満ちて生きることもできるのだ。死の一步手前にあつてなほ夢想し、計画し、生きる希望を失はない男。古賀はそんな男を自分の頭のなかにえがいてゐる。

古賀にとつて「何もの、前にもたじろがぬさうした心」を支えているものは、「自分たちの今まで踏んで来た道」が正しかったのだとう信念である。しかし、ここで示される古賀の心理説明は、非転向を前提としたためにおこる既存の思想の歪曲化ではないだろうか。それは「癩」の岡田の「思想」よりいっそう信仰としての色合いを増している。

片岡鉄兵は、古賀が最後まで転向を肯んぜなかつたとう結論を「捨え物」と言い、「主人公が立場を翻さなかつたかの必然性は、殆ど芸術化されてゐない」と批判した⁸⁹。そしてそうならなかったためには「盲目の惨めな生活の中に、もつと闘争がなければならぬ」と指摘する。たしかに、古賀の非転向は獄という非日常的空間での、また失明という身体的痛苦を伴つた状況でのそれであつたがゆえに、性急に英雄化が試みられた結果であるようならいがある。そのため「捨え物」としての印象は免れ得ないだろう。

三島由紀夫は「盲目」について、「集団のための思想に対して、個人が肉体的不幸を蒙りつつあまりに熾烈に忠誠たらんとする結果、明らかに二つの錯誤が生まれてゐる」として、その「二つの錯誤」を次のように説明する。「すなわち、その思想を支える個人の自我がそれによつて極度に高められ、使命感が自我を自己神化へ導き、救済の代表者としての傲慢へ傾斜させるということが一つと、その反映として、思想自体も純化されすぎ、事情変更の許されぬ絶対的価値を帯びさせられ、思想を信仰に融解させるということが二つである⁹⁰」。三島はこの二つが、「かくも明白に語られていることは、かえつて作品の力を弱めている」という。たしかに、「集団のための思想」に「忠誠たらんとする」古賀の「思想」は、「信仰に融解」しつゝある。この作品末尾で示された古賀の「思想」を作品の否定的側

面とするならば、逆に、古賀が彼なりの明確な「思想」を提示するまでの、内に「ゆらぎ」を抱え込んで苦しんでいる過程は肯定的に捉えることができる。つまり、「盲目」は『かくあるべき自己』と『かくある自己』の「あいだ」に広がる茫漠とした空間が、一個の可能性に満ちた『空虚』として現象化されてゆく^⑧、その過程に作品の価値を認めることができるのである。そういった意味では、最後まで主人公が転向と非転向とのあいだでの「ゆらぎ」を保持したまま閉じられることになった「癩」も同様に評価されるべきであろう。

ただし、「獄中に於ける政治犯人のいろいろな型」の一つとして示された非転向者としての古賀は、当時の非転向の内実を結果的によく示し得ているのではないか。むしろ、作者は獄中での非転向者の「思想」の性質に対してはじめから意識的であり、それを示すことこそ「盲目」の意図であったのではないか、と思われるのである。

五 〈転向〉へのまなざし

徳永直は「癩」について「主観的な思念といつたものがつよすぎて、唯物的な客観性がひどく蔽はれかけてある^⑨」と批判し、「盲目」発表後の評では「あの特殊なテーマ、天刑病者とか盲目とか、特に人間の動物的な苦悩の面をひつぱり出し、その人間の意志とか思想とかを組みたててゆかうとする傾向は決して正しくない。(略)プロレタリアの意志はもつと健康な肉体と、社会的なもの、中に育ぐくまれたものでなければならぬ^⑩」と批判した。この徳永の批評に対し、島木は「批評についての感想／＼(一)暗黒に生きる彼」(『東京朝日新聞』昭10・1・26)で次のように答えている。

こゝで私ははつきりいひたいが、今日ではそれ(政治勢力の敗退、獄中での孤絶、肉体的疾病など——注)が決して異常な

場合ではないといふことだ。かゝる状態につきおとされて初めてその階級人の思想確立の闘ひといふものは今迄にない深刻さで火花を散らして闘はれるのである。私が不十分ながら取上げたのはこの心理の葛藤なのである。たゞこゝで一番問題になるのは、そのために私がとらへた発展のモメントがさういふ暗い外部の世界ではなく、天刑病といひ盲目といひ神経病といふがごとき、特殊な異常事件であつたといふことである。

この島木の文章は「癩」、「盲目」の自注であるにとどまらず、同時代的状況を加味した転向の実態を指摘している。一般に昭和十年前後の転向とは権力の圧力による思想転換をいい、転向文学とはその転向過程を描いたものとされてきた。しかし、転向作家である島木が奇しくも指摘したように、転向への傾斜は必ずしも権力の外的強制によるものだけではない。「精鋭なマルキシストの多くが転向した秘密」を「封建的な生活感情」に見ている島木は、自己の小説における「政治的な立場を守つた人々」に「殉教的な匂ひがし、それを作者が批判的に見ることが出来なかつた」ことを当然のことだといふ（『古い人間』『文芸通信』昭10・8）。つまり、転向には「扶養の義務ある家族のこと、自己の性格の弱さ、肉体的疾病、愛情の問題、埋もる、才能に対する不安と焦燥、小さいけれども彼の持つてゐる社会的な名声など」（『批評についての感想／＼』唯心的な傾向）といった「いろいろ／＼な障害」が関与しているといふことなのである。

そもそも獄外では「政治勢力が敗退してゐる」のである。上條晴史は「転向が文学として扱われたとき、『党』の問題がそこから滑り落ちてゐる。戦後になつてはじめてこの問題は対象化されたわけだが、一九三〇年代といふこの時に、敗北をしたのは『党』そのものであつたことを誰が語りえただらうか^⑧」、と一九三〇年代の転向文学一般の欠落点を指摘しているが、「癩」、「盲目」を書く島木はそのことに対して意識的だつたのではないだろうか。獄中の思想犯にとつて「思想」を支える『党』自体、崩壊の一途を辿つてゐる。そういったなかで獄中での闘ひは「思想確

立の闘い」とならざるを得ないのである。その「思想」は既存のものとしてではなく、これより確立されようとするものなのである。だから島木は「この闘ひの過程における彼の姿といふものは、その外観はあるひは宗教的信仰が人ととらへてゐるのに似たものがあるかも知れぬ」（『批評』）についての感想／＼（『暗黒に生きる彼』）といふのである。「癩」の岡田を支える「思想」が太田には容易に説明できなかったのも、また「盲目」の古賀の「思想」が信仰としての色合いを帯びていったのもそのためであつたらう。

島木は前の文章のなかで、獄中の思想犯が抱える「いろ／＼な障害」のなかに、「自己の性格の弱さ」や「肉体的疾病」と併せて、「扶養の義務ある家族のこと」、「愛情の問題」を挙げている。それらは、「監獄」という外へのベクトルが制約された空間においてさえも、大きな「障害」となつて現れる。思いおこせば「盲目」において、古賀の別れた妻美佐子の薄れゆく愛情は古賀の非転向を貫くひとつの口実となつていた。美佐子がかつての同志上村と恋愛関係に陥つたことを察知した古賀は、「彼女のうちに封建時代の貞女らしいものを予想し、それをのぞむ心」と葛藤しながら、「自分の生活に同士である妻の生活を全く従属させやうとする」封建時代の名残りとは決別する。古賀の非転向は、近代的な合理主義への意識のうちで決断されたといつていいだろう。ただし、母親との関係においてはまた別の感情をはらんでいる。「癩」の末尾近く、病気が重くなつた太田が看病夫の介添えで新しい浴衣に袖を通したとき「本能的にその浴衣に故郷の老母のほひ」をかぐのはなぜか。また、「盲目」の古賀が、母に対して妻との関係のよくな決着を与えることができなかつたのはなぜか。これも「いろ／＼な障害」のうちの一つであろうが、転向（非転向）心理と母親（母子関係）の問題は改めて検討する必要があるだろう。

いずれにせよ島木は、「癩」、「盲目」において、「政治犯人」の獄中生活に転向の要因となる「いろ／＼な障害」を導入することで、「いろいろな型」の一端を示し、また同時に「監獄」における非転向の「思想」形成という観点から、転向への特異なまなざしを示し得たといえるだろう。『獄』における（転向）の意味を解するためには、他の作

品(「転落」、「苦悶」、「医者」)を含めた全体的把握が必要である。『獄』の全体像については稿を改めて検討したいと思う。

注

- (1) 「解説」(新潮文庫『獄(初期短篇集)』昭35・2)。
- (2) 「転向文学論ノオト」(『現代文学序説』創刊号、昭37・10)。
- (3) 島木の病氣以外の転向動機については、かつて「解党派」との関係めぐって考察された。平野謙が、島木が「解党派のうごきと全く無縁だったことはうたがない。もし獄中であつて解党派のうごきを聞き知ったなら、島木は彼らと截然と區別して、みずからの倫理的決意をふかめるばかりだっただろう」(『島木健作の転向』『日本プロレタリア文学案内(2)』三一書房、昭30・9)と考察したのに対し、大久保典夫は、当時の「解党派」発生に関する文献や島木の「再会」に小説化された公判廷の様から、「一時」的ではあるが「解党派」の動きが島木の「転向の理論的根拠(自己合理化)」となったことを推断している(『島木健作ノオト(1)——三一・一五とその前後』『文学者』昭35・7)。
- (4) 「戦うことと避けて通ること」(『文藝』昭10・2)。
- (5) 鶴見俊輔「序言 転向の共同研究について」(思想の科学研究会編『共同研究 転向』上巻、平凡社、昭34・1)。
- (6) 本多秋五は「転向文学論」(岩波講座『文学』第五巻、昭29・2)のなかで、「今日われわれが読んでどこが転向文学なのか解らない作品が当時はれつきとした転向文学とみとめられていた」事情を指摘し、当時の転向基準が「小林多喜二の生き方」であつたと論じている。
- (7) 『昭和文学私論』(毎日新聞社、昭52・3)二二二頁。
- (8) たとえば、より早い時期のものとして、平野謙「島木健作の転向」(前掲)や大久保典夫の一連の島木論が挙げられよう。また、北村巖は「再建」までの四三編を「第一期の作品」として、さらにそれを内容の上で三つに類別している(『島木健作論』近代文藝社、平6・6)。
- (9) (2)に同じ。
- (10) 「島木健作論」(3)——転向文学論(その二)——(『文学者』昭35・9)。

- (11) 小笠原克『島木健作』（明治書院、昭40・10）四四～五五頁。小笠原は中野重治の「村の家」を引き合いにだしながら「私小説的手法による『転向問題』の文学化の不可能性」を指摘し、それを克服するために「幾多のバリエーションのもとに試みた数少ない一人」として島木健作の名をあげている。
- (12) ここでは安藤宏『自意識の昭和文学』（至文堂、平6・3）を参照した。
- (13) 「文芸時評（三）／佳作五篇を読む」（『東京朝日新聞』昭9・4・1）。
- (14) 「文芸時評／主として新作家について」（『文藝』昭9・5）。
- (15) 「春とむし」（『文学評論』昭9・5）。
- (16) 三島由紀夫「解説」（『日本の文学40／林房雄・武田麟太郎・島木健作』中央公論社、昭43・8）。
- (17) (11)に同じ。
- (18) 「七月の刺戟——文芸時評——」（『改造』昭9・8）。
- (19) (16)に同じ。
- (20) (12)に同じ（二一七頁）。
- (21) (15)に同じ。
- (22) 「三四年度に活動したプロ派の新人達」（『文学評論』昭9・12）。
- (23) 「解説」（『思想の海へ「解放と変革」⑮／危機の時代と転向の意識』社会評論社、平2・7）。

※島木作品の初出誌掲載分には多くの伏字が施されているため、引用は原則として国書刊行会編『島木健作全集』所載のものによった。

——大学院文学研究科研究員——

